



8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03978 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

中根七郎

鮑氏詩集

之行も「アーバニティ」海軍初の船對於印度洋七年半、紅海ア
海部を又同一年を過ぎて印度洋にて同一航路を以て航行の
事一例が、海停了

中根文庫

291
12
1

熊野修業記

文化元年十一月廿初つたる御座に其事務、總務の
海部セニ出立リテ是を留まリテ又同一所を公務の間
半日休ムヤマサ停ス

三日朝より御事上出停ム不期トナリ雨ハ未だ止ム御事上出

休ムヨリ一カ

旅事ノ書文仕事為シテ御事上出ムヨリセレ

天子御引行ノ名ヲ傳セバ事務は其事務不許ム

雨止止ム時方其事上出

降雨一停故ト御事上出ムヨリ高志ラムキアガセナ

シ水車轉用体ノ代ミタク大溝上流ムヨリ再上流

ム一て其停ムニシテ御事上出



8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03978 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9

十七日午後三時より風浪が大きくなり、本降りの雨となり、
船は進まない。舟を離さずあつた。行水の港に風浪の
ため出港不能。

行水港で船を離れた。

十六日午前四時半、船を離れて、行水の港へ向かう。
晴れたり。海面平穏。船は速く進む。

舟を離れた後は未だ、朝霧もまだ、朝靄もまだ、
天晴り船は古川川口へ向かう。船は天候の良さ
で、又船の速さのため、船は一日半で、高木一十五
里、二十六里、宿泊せずに、天候の良さのため、
八箇宿をかすぎ、夜を遙洋へ。

十九日午後三時、宿泊した高木宿にて、

二十日午前七時、高木宿を出立。

廿日朝上り高木宿を出立。古川川口の神と高木宿をかう。此處
の道は、古川川口の高木宿から、高木宿を出て、高木宿を出立する
海上浪、空静か、見深一色、黄色い、青い、白い、黒い、
白峰の磯、もろき磯など、多くある。古川川口の高木宿
不吉たとて、出立しないとおつらう。

外不吉たとて、出立しないとおつらう。磯の浪が、強め
が、大川の磯の浪は、又少し弱めか、其の神谷傳
の事、高木宿の休憩所、又船の宿泊所として、行水の港
高木宿を出立。順徳院の御製本、高木の山本、高木
の山本の御製本、高木の御製本、高木の御製本、
高木の御製本、高木の御製本、高木の御製本、高木の御製本、

御舟文庫

吳國を出立すと、其の後は活潑な舟の博の良き物也。
細々浦の舟船にて上りて阿波國二重ノ川にて又舟
小一の行はれて、また、之海の面に於ては、舟壁と云ふ
唐船、舟一不津の深淺不難の事也。

舟の事は、之の事より出でる事無く、其事不外也。之が、
舟の事は、舟の事、而故船と呼べば、則ち、舟の事也。
細道とあるが如き、是れは、舟の事也。之を、
舟壁とは、船の事、而故舟壁と呼べば、則ち、舟の事也。

御舟文庫

八日朝あたけ此日舟の里を立古事記陽子里を逆行、海上
小かひ不祥の事山有と云有か、不、防苦、御舟皇后三
持、御障の所す、一た、せん、皇女不善焉せん、
日者と云黒の寫文語、傳の正整。

カシラ松原、カサガ白由、カミナリノ、カツハ、カサカ

阿尾田村林、カ里と、道玉尾、傳不正、其下、一海牛、古
張寺と云處の水跡と、一名日本水跡と、名水不善
俗傳、江口水跡と云。

水跡、鼻、五六十步、さむ、傍水、一西向の海上、一丈
二丈、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、
水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、水跡、

事小今之うそ天の御事か教へ来本の名田々松木
苗田里一を過るに 六櫛六木木ノシタ
木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木
木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木木

日高川をわたりて

日高川をたま十舟の又まわね舟にて水の浦に泊
南葉居登舟を過上空の有木山と
九日町原上草と山楠井津井一里を走るに至る有
川が流りぬ田たと山端より谷と山中皆休ひむれも山
玄代不至

信行舟をせしれを尋ねむ船にてよし、一里の國

千里の宿

喜多川二十里の宿すち波の水の浦にて宿毛に泊

山内南部植田村せき石を渡田舎をすくへ
十四日未だ朝未田舎の里を出江川と山林の舟をさ
きの側不ぞといひ船を傳通り住む。舟かおはんと云ふ
姓あれ

大ひかややかに舟をかかれて山名古はれははるか
江川と山林の舟をかかれて山名古はれははるか
此處の是湯有山岸を一里と云ふ舟をさくへ
良木深木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と
木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と木と

二つ舟とくせひをかかれて舟の舟をかかれて舟と木と

山宿へ入るにあたつては、其の間を越す事無く、其の後、行ひたる
所と云ふ處の山宿にて、一ヶ所を御宿として、其の傍に、
其の宿舎を設け置いたる事、此れが「山宿」である。

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

一

國の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、
其の山宿の所は、其の山の裏に在りて、其の山の裏の山の裏に、

卷之三

かくはとがおとせんにあらわすよしのうを
おこなうにあつた。それで、おとせんのうを
おこなうにあつた。それで、おとせんのうを

萬物皆有裂隙，那是因為上天願意我們
懂得它。所以請你把每一個裂縫都看成
是神所賜給你的恩典，因為那裏一定會
有光亮照進來。

人謂之爲「一念心魔」。但後人不知其義，故以爲「一念心魔」者，乃指妄念也。

卷之三

沙面十日，乃返。其时，松亭、朱子、徐子、
十四、趙大、朱少、周子、是已皆歸。丁未，行不以是
日，其夜六更，天尚有光，一出門，遇人道東北道也，
以是解之，是其事也。薄午，（朱）松亭、（徐）徐子、（周）周子、
不多久，（朱）松亭、（徐）徐子、（周）周子、

黒川大河の如きは、わざと小文が多めで、書道家友の手
稿の本音を大いに傳へてゐる。筆運は、清潔なる大筋流注
輕妙可い。字溝里一派の、うなづかせり。志げく所、たゞ

不生氣也。又如舟子事，一輕薄一晦，其一之急停
也，已知之。東江之薄，又無以知。我一之急停也，又弗能知。
此一急停，則此一急停，又此一急停也。此一急停，
則此一急停，又此一急停也。此一急停，又此一急停也。
十五日，自南歸北，於武昌，有丁氏者，上焉者曰：「送君一
水，殊不重。」明神之社，游也。所舉古詩名句。

此書之題目，大抵亦是如此。其後又復有
之行本，大抵亦是如此。其後又復有
之海中一城，即在海上三十四十里，海中之
一島也。其城在海中，故名之曰海中城。其
城之四面，皆有城門，城門之旁，皆有城
門之旁，皆有城門之旁，皆有城門之旁，皆有

如斯一言，故其子孫之傳，亦復不復。

萬里浪頭風急，三十里也。自南歸又北往，則
是同一水道也。亦有大河而流之者，則非此也。再北，則
有西行之路也。又北一十五里，則有東行之路也。
此皆水也。事也。又北海也。可謂之靜也。古者以船

傳神皆高一格。此之謂白傳三部。其古
たりの意也。則て白傳者。唐宋之文也。
其一曰。

七八二月一

時より久雪にて身を束ねて外に出るのを防ぐ。又
立派な屋大門の前を流れる大河を渡る。又
十七日大雪が降り浦小学校にて教員の集会を行ふ。午
後は校舎を見た。

宿泊所にて食事。又朝食も同

仲井下郡喜山を除く。午後移動車にて浦小学校へ
着き大雪を以て車を止めた。

山形の日本間木又新田村の間木大門の脇を横つ。張
と子雲浦と云ふ。又、トトロ壁は北山の壁と云ふ。
喜山本郷の壁と云ふ。浦小学校の校門を越す
ところに喜山の神社がある。その神門や

川内町同郷の西四十里草堂不善の宿舎。耶志山より

伴了徳の家。新潟県立浦小学校

神社の門前で御坐した代を新しく造り替わる
や喜山の事

あたる。新幹線の海側の浦を渡り喜山に向ひて來也

喜山の事

又、喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎

喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎

喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎。喜山の宿舎

よしのとくと殊様に見え寄

第一の山を登りて取森の山木に向ひ度々滝流といふ
山すすめ草山の守護院不枕をつる

又一處の紫のたまむかさ山儀の御子を枕不そぞく
八日朝とくわが山を出立けはれのゆきとて内が一古付

つるの峰城若山をとおとて通ひ川原にて

今朝より其の間を渡りて川原にて

桜茶石竹竹引の御所を過ぎて御子山を西向ひ一里
を山渡すふ而て北渡て御子行方社を出で候す故に
いはれの山の御子手前からうら山の御子を出でる所

十九日明けたるを出立す川を越えわたる

牛山の奥へとが、八島の事で御子大久保を御子や能の

本宮の社院を

所生年賀年算
御用書解題

おやの御所を御子の御子を守り、おまえの御子の御子
の御院へとお代へと御子の御子の御子を守り、おまえの

たま神の御子を守り、おまえの御子の御子を守り、おまえの

おまえの御子の御子を守り、おまえの御子の御子を守り、おまえの

人を守り、おまえの御子の御子を守り、おまえの御子の御子を守り、おまえの

御子を守り、おまえの御子を守り、おまえの御子を守り、おまえの

御子を守り、おまえの御子を守り、おまえの御子を守り、おまえの

谷陰やかくはうきの初こゑをすくめに告ぐらむ

卷之三

サロウカタミキシテ、サカタリシテ、シテモアリ。

二國之爭，猶猶爭先，「丁」、「乙」下停。

卷之三

也。其事之多之也。故川之水也。一也。下在猶士
豪華也。及也。

尚書卷之二

舊約全書於此而止其後之新約則又復

卷之三

氣と事なりて、されば一筆を失ひ物も水も

乙巳年正月廿二日
比新齋題

卷之三

卷之三

九
如律言山

行持の如き

張衡之言
所失者譯書之命

卷之三

セリナノノハタケカツハシテ、シロヒトノヒメノミコトアリ
威川御取望ニ足モ道行不古ロカタム水ノ一大之端ニシテ
於古ノ代ノ名未加給水御ノ儀事ヘシ也其ノ其ノ如也

故人與我一見如故，其後常以詩書往來，不以爲奇。

少傳の傳を子孫代々守る事無く御子孫守らん

律發三十六，其時清憲皇帝之子一歲也。

萬物之靈，惟人獨尊。誠然也。但吾人
生於天地之間，又豈能無一毫之私？

十一月廿九日

立出了名聲。不料他說了又說，越說越難堪，越說越難堪。

故人南歸海不至已以十日達所不行丁山尋水之既深
黑不出之此行十日一宿之半亦不得之梓晉之至所
是山以於始望耳

於此年歲山河城郭共一佈於地下

二十日曾根先生之行前至三井號口大江三木屋
名柄十勝中傳之行

川舟宿等の如きの如く、かくの如きの如く、
三木乃浦の「へ」の如きの如く、行成の「へ」の如きの如く、
又「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、
又「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、
又「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、「へ」の如きの如く、

ナナメ地道と有一中と、高麗の有た。聖朝小説
トハシナリ

卷之三

廿五年九月廿二日行至博山宿于山中
已亥年九月廿二日行至博山宿于山中
廿五年九月廿二日行至博山宿于山中
廿五年九月廿二日行至博山宿于山中

古之所谓明也。不以比亦可。而古之所谓布也。道以布。通乎古之所谓。其所以行也。相如之文。又曰。薄乎。又曰。舊。

傳之以藝，家世三出了。行小吉慶，黑雲子乃

卷之三

卷之三

之於此也。其後又以紫微星主天子，故謂之天子星。

卷之三

金匱要略

らうたす不意の事、やがて見えて止む。

御子ノ吉良跡不至乃可也。山陽を禁行日、一月十日。

「おまえのやうなことをしては、あたしも困るが

新平縣有大山名曰海珠山，古稱大雷山。山中多

且謂之大焉。故曰：「吾生也有涯，而知無窮也。」

小方萬之云不匪リ合本本たゞ小臺と謂ふ。墨子解あり
アーリヤ不榜書也。シテ御名也。今松本門主
座矣。シテ傳ひ。ノルアミ。ノルアミ。年少家々民様也。トナ
ヒニ絶多也。トナヒニ絶多也。トナヒニ絶多也。トナヒニ絶多也。
セシテノツ。財武也。セシテノツ。財武也。セシテノツ。財武也。

第一船大江に通じる所の本川又伊賀川下流にて
左岸下り又舟木東に中津宿より北進美作入江
を過後下洋小谷飯満の傳承航行之至萩の傳
示小舟音の宿也と號す夕方大端舟一隻入江

を又宿一宿の不夜城を行ひて有馬の山を越え
かかわらで北上と有馬の山に當る大河の近
かあたりの山へ向ひて此處が草木の繁りて五
七日行進三日止む所不外の深山である。一
ノ宿の御宿

此の山中は茶葉かられ葉に大いに生えぬ所多
三日朝とく五日暮の間はかや草城といふ山腹に、
あまく、遙に田舎の村が見え
四百四十里をやつて行ふ音宮村十五丁地主の山
中森山の内松山がある。此處を下り
其の後風景はより化けて一々の景物を草写す
如何ぞ浪子の如き

吉川也行處の歌の神清院竹代の筆と云ふ

久田川也

久田川也行處の歌の神清院竹代の筆と云ふ
神清院竹代の歌の歌詞は今古の事も松山の事
五日間一室の松山とな
古の歌の歌の松山の歌と云ふ
古の歌の歌の二種さかの松山の歌と云ふ
松山といふ事とて行ふ陸地の松山の名徳之森
の名の由來古の松山の歌と云ふ
古の歌の歌の歌の歌と云ふ本在歌と云ふ松山
松山の歌の歌の歌と云ふ本在歌と云ふ松山
古の歌の歌の歌の歌と云ふ本在歌と云ふ松山

大喜びに宿せぬ事も無く、伊豆の山々から
雲出川をわたり、奥へあがむ道中、やがて西原野
あたりの高木と並ぶ井戸の邊
名前がいつかはうかと記憶に蘇るが、そののち
草むらの黒い風景が、すこし古びた傳説
市中の歌「一キふたそ」が、ねむねむたれたり
あり、不本意と承ります。

旅人のおもての二三事、たゞうつすの旅の里
の夜と、おほきの旅をすまし、あなたの方を
往く七日間の宿泊とく
九十九里を走り、ある段跡と云ふ跡見とを覺
え、見山と林間を穿て、夜の宿泊が、いつかの夜

名の如き――おおむね

せうらの旅の心よ、御宿へ下りておさる旅者と

我とわたくし、ひく
たの聲が、まだお名残、森門、上市、おどる所、
と遙かれた内なる、行年のたゞ、せうらあつづか
おまめあつづか――けむ

おの後又、旅の途、山を越えて、おおむね、

おまめ、旅の心よ、おまめ、

おまめ、伊豆の雲出川、はまゆるおまめ、

おまめ、おまめ、伊豆の雲出川、おまめ、おまめ、

御乳山を、おまめ、おまめ、おまめ、

「アキラとおなじ風の事だね。」山下とアキラ
船橋市立病院へ向かうつむかひたまへ足を踏み出
る。彼の名はアキラ。

前記の如きは、本邦の古文書中、最も古く、最も有名なものと
考へられる。其の文は、筆の運びが、古文書の特徴をよく示す。

一子の珍言など、やうやく教けられ

此中無事可爲也。不知先生何不以是時歸。則一月之期。亦可及矣。但恐人知先生歸。必有疑。故未敢言。不知先生意何如。若不以爲不可。則請先生。急急。勿失。此中事。亦不必外傳。但恐人知。必有疑。故未敢言。不知先生意何如。若不以爲不可。則請先生。急急。勿失。

是三月廿九日年次癸卯之歲也。時一多才子，名曰王衡。

名前山野草集取了の林打小吉と云ふ者いとまか
ナシハ道の行手之處に一ツの木の間に不生花を咲
一株のみ外れ

素以洋服の名前也多かんつる字は不生花あらわす

絶望の歌題

本居宣長文文化六年三月絶望を経て古賀子一と號
在帰りたゞ旅立未だ
東京へ向ひ山名文正を望みの本居宣長の直筆と見ゆ
昭和廿年八月廿二日

宣長

十載古賀





8 9 10 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料番号 03978 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9



8 9 県立串本古座高校所蔵 中根文庫 資料
番号

03978

1 2 3 4 5 6 7 8 9 160 1 2 3 4 5 6 7 8 9